
吸血鬼と眷属の悲しき選択

竹宮 浩二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吸血鬼と眷属の悲しき選択

【Nコード】

N7843V

【作者名】

竹宮 浩二

【あらすじ】

小学生のころ偶然に吸血鬼になってしまった桜は、時間を経て成長し、高校生になっていた。

そして、その日も依頼を遂行しようとしたら、幼なじみの彼女に依頼遂行最中に再開した。

幼なじみを依頼対象の人外に人質に捕われてしまい殺される。

そんな結末を認めたく無かった桜が、ある行為を行う。

プロローグ（前書き）

駄文ですが、どうかお読み頂けると有り難いです。

ブローグ

俺の今回の依頼内容は、人狼の撃退だった。

殺すのではなく、撃退。

理由はわからなかったが、これは依頼だ。

むやみに依頼者の情報を聞き出すのはこの業界ではあまりよろしくない。

ただ、その依頼を受けた自分をひどく後悔するのに気づくのはどうであっても、事件が起きた後なのだから。

そんなことはいざ知らず、彼、山之辺桜は、22時を少し過ぎたあたりで夜道を散歩していた。

性格には、少し妖気を垂れ流しながら、人狼をおびき寄せるんだが、なかなかやってこない。

やけになって今までより2倍の妖気を垂れ流したらものすごいスピードで移動してくる物体を感知できた。

(……来たか)

月夜の光が目を通して反射するさきにその物体はいた。

その物体は、そのままスピードを落とさず俺の目の前の歩行道路に着地した。

当然、人外の速さで着地したのだから音が半端内ほど大きく響くのだが、それはプロなのでそういうのを一般の人間に気づかれないようにする結界は張ってある。

そして、その物体はうつろな目で、こちらを見据えてきた。

静かにそいつは口を開いた。

「お前が、吸血鬼だな……」

「そうだ、お前は誰かに俺の排除を依頼されたのか？」

「そうだ、お前も俺同様、人外だ。いずれ誰かに消される。すまねえな、逆らうと俺がけされるんだ」

（そういうことか、だが、もしあいつが任務を失敗したら？ いや、自分の身だけを心配すればいいことだ。自分だけを守ればいいんだ）

「悪いが俺はここで死ぬ気は無い！　だが、俺も事情があつてな、お前を殺すことはできないんだよ」

俺の言い分に、過去の自分にも似たようなことがあるのか理解したような顔をした。

それだけで、けつして殺すのを躊躇った顔ではなかった。

「そうか、しかし俺はお構いなく殺れる」

刹那、ギリギリだが、ほとんど反応できない速度で、人狼の体当たりがとんできたが、それは勘というやつで交わせた。

しかし、それだけではとまらず再度、振り向きが追いつかない間に体当たりが飛んできた。

（避けられない！！）

そのまま、もろに体当たりを食らう。

「グッ！！」

膝を地面に付くことはなかったが、体内から一気に酸素を奪われ、吐き出しそうになるが何とか留める。

そんな俺にお構いなしに再度体当たりが飛んでくる。

今度は避けた。

それらを何度も繰り返し返していくうちに人狼の攻撃は吸血鬼には当たらなくなっていた。

それに対して人狼は息を切らして大きく肩を上下させていた。

「お前、人狼になって日が浅いな」

単純にそう思えた。本来体がなじんでいればあの体《人狼の体》で息を切らすわけが無いのにあいつは息を切らしている。

単にコンディションに優れないだけと考えたが、それは依頼実行者としてはありえない。

ならもう一つしかなくなる。

あいつは人狼になって日が浅い。

「なぜわかった？ お前こそ高校生になったばかりくらいだろ？」

人狼の言葉に思わず吸血鬼は吹いた。

「そうだな、でも俺が吸血鬼になったのは小学生のときだ。いやでも慣れるさ、この体には。幸い、神話とかに出てくる吸血鬼のように太陽とかに弱いという弱点も無い」

その返事も聞いて人狼も笑った。

「不思議なものだな。人生としては先輩でも、人外としては後輩などとは」

なんら親子の会話と変わらないような空気だったが、いつまでもそれを続ける義理は無い。

吸血鬼は切り出した。

「俺の依頼内容は撃退だ。殺すことではない。だが、せいぜい満身創痍で帰宅してもらうぞ！」

吸血鬼は、先ほどの戦いの最中の1・2倍の力を解放し、人狼を超える速度で吹き飛ばした。

「本来、人狼ごときが、吸血鬼に勝てるわけが無いんだよ……」

吹き飛ばされた人狼は何とか立ち上がったが、すでに足にがたが来ている。たった一撃で。

すぐにでも俺を倒したいのだろう。だが、本能的恐怖がそうさせない。

すでに人狼が吸血鬼には勝てないことが脳では分かっている。

しかし、人狼の依頼内容が、プライドがそれを許さない。

元来、人狼は心が強いのだろう。

そこらの人間ならば、恐怖に打ち負け目の前の恐怖から逃げようとする。

しかし、人狼のなにかがそうさせない。

そこは、人間のころから持っていたものなのだろうけど、もう人ではない。

なおも人狼は吸血鬼を殺そうとしている。

それを吸血鬼は哀れむ。

なぜなら、人狼は涙を流しながら必死に死から逃れようとしているのだから。

吸血鬼を殺せたとしてもいずれ、誰かが人狼を殺しにくる。

吸血鬼を殺せなかったら、何者かに処分される。

いづれにしても、死が近いか遠いかなるだけ。

心の中で葛藤しているのだろう。

「俺が、“解放”してやるよ……………」

解放の意味が分かったのか、人狼は腰を抜かした。

楽にしてやる。

依頼では撃退でも、俺は心は“人間”だ。

そして、一歩ずつ、近づいていく。

すると、付近で絶対に聞こえるはずの無い。

絶対に一般人が入ることはできな領域に誰かがいる。

いまさらになって気づいた。自分で張った結界の中にいる人物は有効範囲内ならわかるのに。

しかし、すぐに理由はわかった。

吸血鬼の張る結界は妖の類のものにしか反応を示さない。

結界はあくまで人の脳に作用させて、近づけさせないこと。

結界内に入った人間の対象方法は考えていなかった。

だから、偶然通りかかった、人間が俺たちの戦いを見ていて、逃げようとして、音を立たせずに静かに去ろうとしたのだろう。

しかし、付近の石を蹴ってしまった。

一体どんな漫画や小説だよ…といったくなるが、今は本当の戦場だ。

少しの油断が命取りとなる。

逆に、少しの隙があれば形成は逆転する。

人狼は、付近にいた人間を盾にとろうとした。

（くそ！ 油断した！）

さっきまで自分がそうなるとは思っていなかった吸血鬼は盾に取られないように人間のもとに行こうとしたが、瞬発力は人狼のほうが上だったため、人間を、人間の彼女を、幼馴染の由美を盾に取られた。

一瞬で、思考が落ちる。

（なんでここに由美が？ さっきまでの一部始終を見られた？）

「あつ……あ……」

何も言えない吸血鬼に対して人狼は随分勝気を取り戻した。それはあからさまな吸血鬼の反応にたいしてだろう。

「俺を殺すんだったらこいつを殺す。お前は性格的に人間を殺すのは良しとはしないんだろう？ こいつ《人間》が人質なら下手に手はだせない」

人狼は、鋭く伸びた鉤爪を彼女の首筋に当てた。

当然、意識のある彼女は怯える。

ただでさえ非日常なものを見た上に、殺されかかっている。

（やめろ……やめてくれ……）

「こいつは預かるぜ」

そう言って人狼はどこかに跳躍して言った。

人狼が消えてから数分がたった今でも、

吸血鬼は呆然と道路に突っ立っていた。

状況についてはいけずにとまっているだけ。

どうして？ なぜこんなふうな出会いを？ そんな思考のループに陥る。

しかし、いつまでもこうしてられない。

早く奴を追いかねければ。

そこで、重要なことに気づいた。

人質になった由美を生きたまま返してくれるわけが無い。

元から殺される身の人狼だ。

すでに人間のころの心は残っていない。

焦りが、恐怖が、情けなさが急速にこみ上げてくる。

それにあわせて、かぎなれた血の臭い。

この血の臭いは由美だ……。

「あああああああああああああああ！」

真夜中に近い時間でも奇声を上げずに入られなかった。

何をしているんだ俺は！

お前はもう何年もこの仕事を続けてきたプロのはずなのに。

幼馴染という枷によって、油断して、この鼻腔をくすぐる臭い。

間違い無い。

“殺られた”。

すぐに血の臭いを追うために力を全力で解放した。そのさきには一人の気配しかしなかったが、それは分かりきっている事だった。

目の前に横たわる彼女は、どこからかはわからないが、傷口からは大量の血が地面にドクドクと面積を広げている。

「何なんだよこれ…… どうしてだよ…… どうしてこなったんだよ！」

今の目の前の現象を引き起こしたのは、間接的にも俺なのだから、叫ばずにはいられない。

今この思いを心に留めておく事はできない。

「死なせるか！！ 絶対に死なせない！ これがどんな行為だとしても、俺は止まらない」

そうして、彼は夜の街で薄暗い道路の中、彼女の首筋に牙を宛がう。

ポタ、ポタ、と首筋にできた二つの穴から血が垂れる。

「戻って来い！」

数時間が経ったであろうか、流れ出る血は止まり、数時間前まで血の気の失せた真つ白な顔に肌色が戻り始めていた。

本来、助かるはずの無い傷を負った彼女はもう、満身創痍ではなくなっていた。

今は、とりあえず彼女を家に帰さなくては。

そうおもって、数キロ離れた彼女の家へと向かい、彼女の母親に

体を託した。

翌日、何時もと変わらず学校に登校する。

しかし、自分の想像を超えるほど、彼女の“眷属”になる初期症状の進行スピードは速かった。

校内では、夏休み明けなのに対してホラーの話は途絶えてはいなかった。

夏休み最後の31日にテレビで持ち上がった吸血鬼が実在するという話題から、それを退治する機関があるという根も半もない話が蔓延していた。

当然、俺の周りの友達たちもそれに興味を示していた。

実際俺は、恐怖、いや、落ち着かない気分を味わっていた。

あたりまえだ。

吸血鬼も、それを退治する機関も実在し、俺はそれらに追われる立場なのだから。

俺は吸血鬼であつてそうではない。

日光に弱い、聖なる水に弱い、とか弱点になる要素は無いに等しい。不死身に近いだけで不死身ではない。

吸血鬼崩れの俺でも当然血は欲しくなる。

何とか理性を抑えれば二ヶ月以上は我慢できるがそれを超えたときに俺は理性を保てなくなり、人を襲った。

それを感じ取った“彼女”は、どこに行つてたかは知らないけど、数分で飛んできて俺を止めてくれたらしい。（ただ、彼女は絶対に国内にはいなかったことは確実なんだが…）

らしいというのは、そのまま“彼女”に聞かされた話であつておれ自身はまったく覚えていないからだ。

まあ、なににせよ、俺は吸血鬼で狙われる対象であり、それを隠して人間として暮らしている。

たまに、変な知り合いからとんでもな依頼を持つてこられたこと

があるが、その、報酬がいち高校生としては高すぎて、お金に目がくらみました。

その仕事を受けてからというもの、たびたび似たようなものが依頼としてもって来られる。

まあ、そのおかげで、軽く俺の銀行には、そ…その、一千万ほどあるんだ。

（あゝ家出してえゝ、だけど、家出したら母さんに殺される……それに、夜道を歩いていたら吸血鬼専門退治がやってくることもある）
学校で心底から震えるのがわかるほどフルフルしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7843v/>

吸血鬼と眷属の悲しき選択

2011年8月15日03時14分発行